

Title	校本「新和歌集」(上)
Sub Title	Collated text of the Shin Wakashu (I)
Author	小林, 一彦(Kobayashi, Kazuhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1986
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.50, (1986. 12) ,p.22- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00500001-0022">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00500001-0022</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 校本『新和歌集』(上)

小林 一彦

この校本は、神宮文庫蔵特別本を底本とし、解題に示した他の七本を校合本として、その本文の異同を上欄に掲出したものである。

## 凡 例

一、底本の翻刻に際しては原写本の再現を心がけ、以下の点を除き底本のままとした。

(1) 旧字・異体字等は、通現行字体に改めることを原則とした。

(2) 詞書に関しては、底本の形式に止らず、私に改行を行つたところもある。また、読点を最少限に施し、便宜をはかった。

(3) 明らかに誤字・誤脱等と確認される当該箇所については、右に(ママ)を傍記した。空格については、推定される字数を□を用いて補った。

(4) 丁数は漢数字を以て示し、各葉の表裏は「」を以て区別

した。その際、裏には「ウ」を付した。

(5) 和歌歌頭には、便宜上連番を付した。また、校異の当該箇所を明示するために、右傍に\*を付した。

一、校異の掲出にあたっては、以下の方針に従った。

(1) 仮名遣の異同については、全てこれを掲出し、漢字訓は歴史的仮名遣に従うこととした。(例、「猶」「なほ」は異文と認めず、「なお」「なを」の場合のみ掲出)

(2) 彰考館本はその奥書(解題参照)に記する如く、同本に見られる朱筆校合については、全て掲出した。もとより、同本の朱筆校合により、当時の伝存対校本の原態を予想することは困難であろうが、或はその姿を多少なりとも窺知し得る縁となれば、と思う故を以てである。

(3) 底本並に校合本の本文本行の異同如何によらず、両本間に表示されたイ本・校記については、これを掲出した。

(4) 漢字・仮名、送り仮名、格助詞の「の」、「む」、「ん」等の異同については、これを略した。

(5) 見消ち・補入記号等については、問題提起が予想される箇所(彰考館本の朱筆によるもの等)を除き、他は省略した。また、踊り字の異同はこれを略した。

(6) 校訂者による注意書きを「輪」字朱の如く、「」を以て記した。

(7) 同一異文が複数諸本にわたって見られる場合、掲出本文は初出の対校本文に従った。

### 解題

底本と校合諸本(略称)の書誌を、以下に簡略に示す。

### 〈底本〉

(1) 神宮文庫蔵特別本 (三十七四六特)

〔江戸中期〕写。薄様袋綴一冊。表紙、蒲色艶出無地、縦二七・〇×横一九・三糎。左肩白紙金泥草花模様題簽「新和哥集」。内題「新和詞(歌)・哥集 卷第一(一十)」。墨付七六丁(うち「新和歌集目録」五丁)、遊紙前一丁。每半葉一五行(目録同一三行)、和歌一首一行。字高約二〇・七糎、詞書二字下げ。全一〇巻、歌數八七五首。印記「林崎文庫」二種。奥書「此宇津宮打聞新式和哥集者為氏卿/下宇津宮<sup>抄</sup>之有子細式之字除之」。

### 〈校合本〉

(2) 神宮文庫蔵本(神) (三十七四七)

〔江戸中期〕写。薄様袋綴一冊。表紙、小豆色卍繋地松竹梅丸紋空押、縦二八・六×横二〇・五糎。中央白紙片手持棒題簽「新式和詞集」(「式」字上朱ニテ〇印)。内題「新和詞(歌)・哥集 卷第一(一十)」。墨付八九丁(うち「新和歌集目録」五丁)、遊紙前後各二丁。每半葉二二行、和歌一首一行。字高約二二・八糎、詞書二字下げ。全一〇巻、歌數八七五首。印記「林崎文庫」他一印。奥書「此宇津宮打聞新式和哥集者為氏卿下/宇津宮<sup>抄</sup>之有子細式之字除之」。

(3) 学習院大学国文学科研究室蔵本(学) (三条西一〇三)

〔江戸中期〕写。薄様袋綴一冊。表紙、藍色雲形裏打修補を加う。縦二七・九×横一九・七糎。左肩題簽「新式和歌集十冊」(別筆)、右肩打付書「宇都宮公綱蓮生法師 南朝元弘年中/為家卿撰」(別筆)。内題「新和詞(歌)・哥集 卷第一(一十)」。墨付一二二丁(うち「新和歌集目録」六丁)。每半葉九行、和歌一首一行。字高約二一・四糎、詞書三字下げ。全一〇巻、歌數八七五首。三条西家、実義の蔵書印有。奥書「此宇津宮打聞新式和哥集者藤原為氏卿下向宇津宮/撰之有子細式之一字除之云々」。

(4) 宇都宮二荒山神社蔵本(荒) (11111春下)

寛文一二年写。薄様袋綴一冊。表紙、香色艶出無地、縦二六・七×横一七・七糎。左肩緑色地草花模様題簽「新式和歌集 完 宇津宮打聞」。内題「新和詞(歌)・哥集 卷第一(一

(7) 墨付一〇九丁(うち「新〇和歌集目録」六丁)、遊紙前一丁。每半葉一〇行、和歌一首一行。字高約二一・一糎、詞書四字下げ。全一〇卷、歌數八七五首。印記「正因」「望雷百里」「耽書堂」。奥書「此宇津宮打聞新式和哥集者藤原為氏卿下向宇津宮撰之有子細式之一字除之云々」「干時寛文十二壬子春三月仕宦之暇自戌午至辛酉寫校共畢右耽書堂望百里藏書」

(5) 彰考館文庫藏本(彰) (一四 06877・06878)

元禄七年写。薄様袋綴二冊。表紙、肌色布目、縦二九・九×横二〇・八糎。上冊・題簽剝落後、左肩打付書「新和歌集上副」、下冊・左肩白紙題簽「新和歌集下」。内題同(卷第一、十)。墨付、上冊六五丁、下冊五七丁(うち「新和歌集目録」七丁)。每半葉九行、和歌一首一行。字高約二一・〇糎、詞書二字下げ。全一〇卷、歌數八七四首(九二番歌脱)。奥書「此新和歌集上下二條家為氏卿眞翰無疑者也」當家依子細有之加愚筆畢/寛文五初春 冷泉左中將為清(花押似書)。「右新和歌集上下二冊以為氏卿眞跡為清奥書之本令書寫奥書透寫訖其後又得一本相違之/所以宋書付畢(但點墨等)天和二年三月日 宗永 別筆貼紙「右新和歌集貳冊元禄七甲戌仲冬以板垣宗堦所傳/借田村右京大夫建顯所藏本寫寫/彰考館識」

(6) 天理図書館藏本(天) (911, 24 23)

〔江戸中期〕写。鳥の子、綴葉装一帖。表紙、藍色地菊葉金繡古裂、縦二一・二×横一四・八糎。見返し、金切箔散らし。

左肩打曇斐紙金泥雲形題簽「新和調集自一到十」。内題「新和調集卷第一(一十)」。折數一五折、各折九枚内外。墨付丁數二一〇丁、遊紙前後各一丁の他、中一八丁。每半葉八行、和歌一首二行。字高約一四・五糎、詞書二字下げ。全一〇卷、歌數八六〇首。卷三・秋、一七一・歌一八五・歌までの一五首欠(本文料紙の切取による脱落)。印記「書木氏藏書印」「牧氏藏書之記」他一印。奥書ナシ。

(7) 群書類従本(群)

群書類従の和歌部八、卷一五三上・下(二冊)に収められている整版本。内題「新和歌集 卷第一(一十)」。全一〇卷、歌數八七五首。下冊に「新和歌集目録」併収。奥書「此宇津宮打聞新式和哥集者為氏卿下向宇都宮/撰之有子細式之一字除之云々」(本稿では慶応大学図書館蔵本を使用した)

(8) ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫藏本(清) (D-171, 1-1) 黒川本

〔江戸末期〕写。斐楮交漉紙袋綴一冊。表紙、素色布目、縦二五・五×横一八・三糎。左肩打付書「後葉和歌集其他六種」(朱、別筆)とある如く、女流歌人の歌ばかりを抄出・集成した七種の作品より成る。内題「新和歌集」。墨付全五六丁の内、「新和歌集」四丁。每半葉一二行、和歌一首一行。字高約二〇・五糎、詞書三字下げ。全歌數四二首。奥書「此宇都宮打聞新式和歌集者藤原為氏卿下向宇都宮/撰之有子細式之一字除之云々」印記「黒川眞前藏書」「黒川眞道藏書」「月の屋」の三

「印より、「横山由清寫本」という帙上部打付書は信頼するに足るものと思われる。

上述の如く、底本は「新和歌集」、及び巻末の「新和歌集目録」より成る。また校合本の中にも同様の組成をとるものが多い。然しながら、同目録は歌集の成立時に編まれたものか疑わしく、相互の関係については猶今後の研究課題とし、後日を期すべき性格のものと考え。従って「新和歌集目録」については今回その対象外とし、「新和歌集」そのものの校本を作成することを第一義とした。

#### 〔付記〕

本稿は、昭和六十年修士論文・資料編、校本「新和歌

集」をもとに作成されたものである。同資料編のみならず、修士論文・本文編を叙するにあたって、左の御論考並に御本より多大なる学恩を賜った。

・長崎健氏「新和歌集の諸本について」(『中央大学文学部紀要』昭49・3)

・石川速夫氏『新式和歌集』(『荒山神社刊、昭51・10』)

長崎・石川両先生に、深く感謝し申し上げます。また、此の度、活字にするにあたり、平澤五郎先生より種々貴重な御教示を戴き、修訂を施すことができた。記して御礼申し上げます。

最後に、貴重な御所蔵本の底本使用を御許可下された神宮文庫をはじめ、諸本の調査・閲覧に際し、収蔵各文庫・図書館・機関・及び職員の皆様より賜った御厚誼に対し、衷心より深謝し申し上げる次第である。

新 和調集卷第一

春哥

立春のころを

蓮生 法師

一 いつしかと霞もあらぬ山の端のあさ日よりこそ春は見えけれ

藤原 泰綱

二 たちかはる春のけしきもあらはれて峯のあさひの影そのとけき

信生 法師

三 梓弓はるきにけらしたかまとのおのへのみやに霞たなひく

浄意 法師

四 こほりぬし谷のをかはの忘水いはまをとめて春はきにけり

藤原 時朝

五 煙たつむろのやしまのちかければわかすむかたや霞そむらん

蓮生 法師

六 雪きえぬたかねも春の色なからふもとはかりにたつ霞哉

宇都宮神宮寺障子哥

京極入道中納言

七 かすめともまつにやはみるしら雲のはるもふりしくみよしの山

藤原 泰綱

八 白雪のきえぬ野原をふみ分てけふそわかなをつみはしめける

蓮生法師八十賀屏風哥

冷泉前大納言

九 春のくるけふのわかなもせり川のちよのふるみち年をつみつゝ

館にて百五十番哥合し侍けるに

藤原 景綱

一\* あらぬーやらぬ(学)、あえぬ(彰)、あへぬ(群)

三\* たかまとーたかさこ(天)、\* おのへーをのへ(神天群)

四\* むしーいし(神天)

五\* 哥中にー哥に(彰天群)、\* 時朝ー時明(神学荒群)

六\* きえぬーきへぬ(天)

七\* 中納言ー中納言定家卿(学学荒群)、\* まつにーま  
れイ  
つに(学)、まれに(彰天群)、\* しら雲のー白雪  
の(学荒群)、しら雲の(彰)  
雪歌

八\* きえぬーきへぬ(天)

九\* 大納言ー大納言為家卿(学学荒群)、\* (歌)ー行間  
小字墨袖(彰)

二〇\* 詞書・作者名―行間小字墨補(彰)、\*合  
志―ナシ(天)

二〇\* さと人の衣手さむみわかなつむあしたのはらに雪はふりつゝ  
証定 法師

二一\* まうてゝ、もうてゝ(神学荒群)、\*(〇印)―ナ  
シ(天群)

二一\* 卷向の山はかすみてみゆきふる小松か原に鶯そなく  
春はいつしかまうてゝ山里のすまぬみんと申たる人のもと  
蓮生 法師<sup>二〇</sup>

二二\* きえて―きへて(天)、\*こその一よその(神)

二二\* 三〇春きてもあとなきにはの昔の上にときゆる雪をみる哉  
源 長 継

二三\* 折―おり(学荒彰天)

二三\* 三〇春きてもあとなきにはの昔の上にときゆる雪をみる哉  
題 不 知  
源 長 継

二四\* 折―おり(学荒彰天)

二四\* 三〇春きてもあとなきにはの昔の上にときゆる雪をみる哉  
題 不 知  
源 長 継

二五\* 折―おり(学荒彰天)

二五\* 三〇春きてもあとなきにはの昔の上にときゆる雪をみる哉  
題 不 知  
源 長 継

二六\* 折―おり(学荒彰天)

二六\* 三〇春きてもあとなきにはの昔の上にときゆる雪をみる哉  
題 不 知  
源 長 継

二七\* 折―おり(学荒彰天)

二七\* 三〇春きてもあとなきにはの昔の上にときゆる雪をみる哉  
題 不 知  
源 長 継

二八\* 折―おり(学荒彰天)

二八\* 三〇春きてもあとなきにはの昔の上にときゆる雪をみる哉  
題 不 知  
源 長 継

二九\* 折―おり(学荒彰天)

二九\* 三〇春きてもあとなきにはの昔の上にときゆる雪をみる哉  
題 不 知  
源 長 継

三〇\* 折―おり(学荒彰天)

三〇\* 三〇春きてもあとなきにはの昔の上にときゆる雪をみる哉  
題 不 知  
源 長 継

三一\* 折―おり(学荒彰天)

三一\* 三〇春きてもあとなきにはの昔の上にときゆる雪をみる哉  
題 不 知  
源 長 継

言 \*侍しに―侍けるに(天)

三 \*初風―初花(神学荒彰天群)

三 \*八十賀―八十賀(群)、\*屏風哥―屏風哥連生八十賀正嘉元年ト為家集ニアリ(学荒)、\*大納言―大納言為家卿(荒)

三 \*おこせ―おらせ(天)、をこせ(群)、\*折―おる(神学荒彰天群)、\*かをは―かは(神天)

三 \*さくころ―さくへきころ(彰天群)、\*うちきらし―うちきえし(神)、うらきらし(彰)、\*猶―なを(群)

元 \*あさある―あさいる(天)

三 \*谷忠―ナシ(天)

三 あけはまつ風をしるへにたつねみんねさめにかほる梅の初花  
藤原 時家  
梅花薫風といふ事を  
坂上 家光

三 とめゆかんだかすむやとゝわかすとも風をしるへの梅の初風  
冷泉前大納言  
蓮生法師八十賀屏風哥

三 さきにはほふ梅つの川の花さかりうつる鏡のかけもくもらす  
浄意 法師  
人の花をこひにおこせたりけるにおりてやるとて  
折袖にかをはとゝめて梅の花色はかりをや人にしられん  
河辺柳

三 青柳のかけ行水のかみとりあさせもしらぬ春の川なみ  
源 親 行  
夕霞

三 みか月のおほろにみゆるかけろふの有かなきかに霞空哉  
大中臣能範  
題不知

三 いかはかり山のあなたもかすむらんおほろに見えて出る月かけ  
坂上 道清  
花のさくころ雪のふり侍ければ

三 うちきらし猶ふる雪に山桜えたにこまれる花の面影  
藤原 時朝  
百首哥中に

三 はつ春の梢にさえぬしら雪は花にさきたつ花かとそみる  
藤原 泰朝  
山花

元 よしの山峯にあさあるしら雲のかさなるいろや桜なるらん  
蓮生 法師

三 いら雲のあとなきみねの霞より風をたよりの花のかそする  
源 親 行



鶴岳社十首哥に

三 いかはかり人のこゝろをつくすらん花さくころのみねのしら雲 藤原 朝景

三 宇都宮神宮寺廿首哥に 藤原 時家

三 雲はみなたえくみえしみよしのゝ山のまもなく花さきにけり 浄意 法師

三 題不知

三 吉野山いく木の桜さきぬとも初花までのよそめけり 橘 友家女

三 藤原景綱五十番哥合に、朝野山花 清原 時季

三 みよし野のよしのゝ山をけさこえてまつ我はかりみつる花哉 大江 季房

三 同哥合に、山路花 藤原 言盛

三 たつね入さくらは花に咲にけり山路の末にかゝるしら雲 藤原 親朝

三 かけとめて尋はいりぬ山さくらかへるみちにやしるへなるらん 丹波広長朝臣

三 題不知 藤原 景綱

三 雲とのみ思ひやはてむ山桜吹くるかせににほはさりせば 藤原 景綱

三 藤原時朝よませ侍ける哥の中にニウ 冷泉前大納言

三 かつらきや花こそ雲のよそならめかをたにおくれ風の便に 藤原 景綱

三 花の哥とてよめる 藤原 景綱

三 いくとせの春のすみかと成ぬらんよしのゝ奥の花の下影 藤原 景綱

三 蓮生法師八十賀屏風哥 藤原 景綱

三 思ひいつやをしほの山のさくら花かけし神代の春の昔を 藤原 景綱

三 百五十番哥合し侍けるに 藤原 景綱

三 \*みな―猶(神学荒彰天)、なを(群)、\*たえく

―たへく(天)、\*まもなく―まもなく(学)

三 \*けり―ける(神)

三 \*朝野山花―朝望山花(神学荒彰天群)、\*こえて  
―こへて(天)

三 \*かけ―かけ(学)、かを(彰天群)、\*なるらん―  
なからん(天群)

三 \*ならめ―ならめ(学)、\*かをたに―かほたに  
(神)、\*おくれ―をくれ(神学荒彰天群)、\*便  
に―たよりは(天群)

三 \*成ぬらん―成らん(学)、成らん(荒)

三 \*大納言―大納言(家卿(荒)、\*をしほの山―おし  
ほの山(天)

四 \*し侍ける―侍ける(彰)、\*をしほ山―おしほや  
ま(天)

四 \*都―みゆこ(天)

四 \*家つと―いゑつと(彰天)

四 \*兼忠―謙忠(彰天)

四 \*をしまかさき―おしまかさき(神学荒天)、をし  
まるさき(彰)、\*かす―かそ(荒)

四 \*浄意法師女―ナシ(荒)、浄意法師(天)

五 \*惜―おし(神学荒天群)

四 いにしへの神代をかけてをしほ山しらゆふ花の今も咲らし

証定 法師

四 花の色の白木綿かけて玉くしけみむろの山に春風そ吹

鎌倉入道大納言家月次御会

藤原 泰綱

四 さほひめの手向の山の春風に雲にもなひく花のしらゆふ

題不知

藤原 頼業

四 山さとの人にとはゝや都よりほかにもかゝる花やにほふと

道願 法師

四 山高み心のゆきておる花は人にみすへき家つとそなき

宇都宮神宮寺甘首哥に

浄忍 法師

四 ちらぬまにいさかへりなむ山さくらさかりをのちの思出にして

権律師兼忠

四 よし野山見ぬにもおしき名残哉きのふけふこそ花はちるらめ

海辺帰鷹

藤原 頼業

四 松鳴やをしまかさきの夕なきにかすあらはれて帰る鷹かね

帰鷹を

浄意法師女

四 春といへは花なき里に行鷹の心のうちやのとけかるらん

宇都宮神宮寺甘首哥に

藤原 朝氏朝氏

四 かへる雁いかにちきりて春ことの花にわかるゝならひ成らん

照因 法師

五 行すゑもおなしはるとや雁かねの花に別を惜まざるらん

清原 時高

三\*おなしくーをなしく(天)

三\*おなしくはこしちの花のちらぬまにかへらはいそけ春の雁かね

西円 法師

三\*おしきーをしき(神彰天)

三 ちらぬまにかへるは花のうきなまでおしき別の春の鷹金

信生 法師

三\*きゝすーきえす(神)、\*妻こひーつまらひ(天)

三 あしひきのかた山きゝすうちはふき妻こひすなり春のあけほの

藤原 泰綱

三 葛城や雲も桜もわかぬまでひとつ色なる春の曙

三\*(合忠ーナシ)天)

三 明けわたると山の花にうつろひて色の千種に立霞哉

\*藤原 景綱

三\*藤原景綱ーナシ(一行分空白)(荒)、\*たえまー  
たへま(天)

三 明わたるみねの霞のたえまより桜に残る入かたの月

藤原 時盛

三 くもるともいかゝいとむ春の夜の月にあまぎる花の白ゆき

平時重

題不知

三 さくら木の梢はかりやくもるらん花の雪ふる春の山里

証定 法師

稲田姫社十首哥に

三 かすみしく山のおへの桜かりぬれこそぬれめ雪は降とも

大中臣能範

藤原時朝四十八首哥すゝめ侍けるに

三 雪とのみふるやみかさの山桜さすかにぬるゝこのもとそなき

親成 法師

水上落花

三 みなそこのかけふちかふと見えつるは木末の花の散にそ有ける

坂上 道清

藤原景綱五十番哥合し侍けるに、朝山花

三 すかはらやふしみの里のあさといてに花のかむかふおはつせの山

三\*おはつせーをはつせ(群)

三\*かけふーかけの(神学荒彰天群)

空\* (台忠) | ナシ (彰天)

空\* をのゝひ | おのゝひ (神天)、おのゝえ (学荒彰)、  
をのゝえ 群、\* 花に | 花も (神)、\* いへち |  
いふち (神学荒彰天)  
空\* 猶 | なを (群)

六\* ころそ | からそ (彰)

究\* 哥に | 哥中 (天)

七\* 思に | 思ひに (天)

七\* には | へーにはえ (学荒)

三\* (台忠) アリ | 彰、\* 命もて | いのちにて (彰)、  
\* おしみ | をしみ (神彰天群)

三\* まかせ | さかせ (天)

題不知

空\* いまそしる春はたつぬる山里の花より外のあるし有とは

藤原 俊定

空\* をのゝひもくち木のそまの山桜花にいへちを忘れぬる哉

西入 法師

空\* 花ゆへに猶ふるさとかへりきぬ命そ世をはそむかさりける

鎌倉三品親王家に三百六十首哥たてまつりける中に

藤原 時朝

空\* 花みれば身のうへこそ忘れけれのきはの桜なをやうへまし

藤原 景綱

六\* わきかぬる雲と花とは山桜うつろふころそ色をみせける

源 基 氏

究\* 此ころはたよりと人も思ふらん花ちりてこん春の山里

丹波 国長

七\* ちらぬより思におつるなみた哉あたなるはなのうしろめたさに

蓮生 法師

七\* 今よりはかくのみにほへ桜花この春はかりのとけきはなし

信生 法師

三\* あたにのみ思ひし人の命もて花をいくたひおしみきぬらん

三 山さくらちりしくにはの名残までさそふ嵐にまかせずも哉

想生 法師

七 落花生水  
よしの川なかれの末のさと人は散てのちや花をみるらん

鶴岳社十首哥に

五 ありてよのゝちはうくとも桜花さそひなはてそ春の山かせ

藤原 景綱

六 散のこる花もこそあれ有てよのはてとないひそ花のきかくに

藤原 基政

七 花のちりかたに成けるを見侍て

藤原 時朝

七 花色をうつりにけりとみるほどに我身さかりの過にける哉

岸藤 信生 法師シ 六

六 咲にけりたれにみせましおく山のいはかきぬまの岸の藤浪

源 宗 景

五 藤花さくやときはの松にたにはるくれかゝるいろはみえけり

藤原 景綱

六 山ふきの花のしからみせきもあへすはるくれてゆく井ての河なみ

清原 公高

六 ちるはなのわかれのみかはおほかたのはるさへ今は夕かたの空

藤原 実朝

六 おしめともよもの嵐にちる花の残すくなくゝるゝ春かな

藤原 時朝

六 ちりのこる木末の花をなかむれば春の光もすくなかりけり

藤原 頼業レ

六 花もちり春もくれぬる山のはに霞はかりそ猶のこりける

浄意 法師

六 めぐりあふならひはかりをたのみにてことしも春に又わかれぬる

七 \* 藤原時朝—藤原基朝(神)

五 \* 源宗景—源宗景(神)

六 \* (〇印)—ナシ(彰天群)、\*あへす—あえず(学荒)、あらず(天)

六 \* 実朝—実好(学荒彰天群)、\*おしめ—惜め(群)、\*すくなく—すくなる(彰)

六 \* ける—けり(彰天)

新 和歌集卷第二

夏哥

住吉社の会に

藤原 時朝

六六\* けりーける(神学荒影天群)

六六 花をみしそのこのもとをたちかへて夏そきにけり衣手の杜\*

藤原 泰重

六七\* 更衣ーナシ(荒)、\*今はとやー今はとや(学荒)、  
今はとや(彰)

六七\* 今はとやひとへにかへむ夏衣はなのたもとをよそになしつゝ

藤原 親時

六八\* 題しらすーナシ(群)

六八 たちかふる衣の袖はうすけれとはるの名残のふかくも有哉

清原 公高

六九\* 藤原基政ー藤原基政(荒)

六九 花ちるといとひし風のいつのまに袖にまたるゝ夏のきぬらん

藤原 基政

七〇\* 素蓮法師ー景蓮法師(神)、\*きてはーまでは(神学荒影天群)

七〇 まかへはやあを葉ましりの桜色にいまはうつきの花染のそて

素蓮 法師

七一\* (詞書・作者名・歌)ーナシ(彰)、\*おりーをり(神学荒天)、\*ならぬかはーならぬ(荒)

七一 春さてはたゝなをさりのへたてかとみえしかきねに咲る卯花

浄意 法師

七二\* 大納言ー大納言為家卿(荒)

七二 けふとてもおりはやつさしかしは木の葉もりの神は神ならぬかは

冷泉前大納言

七三 宇都宮神宮寺障子哥

七三 しのひねのときはの杜の郭公まつほとにたに夏はしりにき

京極入道中納言

六四 \* 障子哥—障子哥に(神学荒彰天群)

六三 \* 猶—なを(神学荒彰天群清)

六二 \* なくは—なくね(彰天群)、\*くもり—くもる(神学荒彰天群)

六一 \* (〇印)—ナシ(天群)

一〇二 \* ひとこゑ—ひとゝへ(天)

一〇三 \* かひ—かい(荒)

一〇四 \* おなし—をなし(神彰)

一〇五 \* 夕郭公—夕郭公を(彰天群)、\*しるからん—しるゝらん(天)、\*名のり—なのみ(神)

六四 むら雨もふるの山への時鳥思ひすつへきすきのかけかは

題不知

藤原重頼女

六三 ほとゝきす猶まちかぬる村雨に月さへ山をいてそわつらふ

鶴岳社十首哥に

藤原 時盛

六二 いたつらにねをなく山のほとゝきすまつにしなればつれなかりけり

藤原 朝景

六一 郭公なくはまたるゝこよひ哉空かきくもりたひのまくらに

藤原 景綱<sup>ヘウ</sup>

六〇 有明の月にまてとや時鳥をのかなかねもつれなかるらん

題しらす

源 宗 景

五九 郭公恨ても猶またれけりねられぬ月の有明のそら

藤原 親朝

一〇〇 人つてにことしもきゝつほとゝきすうき身をいとふ初音成けり

坂上 道清

一〇一 ひとこゑに忘れやせまし時鳥まつとせしまの心つくしは

蓮生 法師

一〇二 子規たかすむ宿もあし引の山のかひある初音きかせよ

源 親 行

一〇三 わけきつるおなし山ちの郭公さとゝふくれも鳴てすくなり

冷泉前大納言家に百首哥たてまつりけるに、夕郭公

藤原 時朝

一〇四 しのへともたそかれ時やしるからん名のりそめたる山郭公

二五\* (○印)―ナシ(彰天群)、\*猶―なを(神学荒彰天群)

二六\*こま山―こさま(天)

二六\*(○印)―ナシ(彰天群)、\*つる―ける(彰天群)

二九\*藤清定―藤原清定(神学荒彰天群)、\*こゑ―こへ(天)

二二\*をの涙―をのか涙(神学荒彰天群)、\*しくれかつくイしくれかつくイ(空子、しつくか(荒天)、しつくか(彰))

二三\*人や―人は(彰)

二四\*こゑ―こへ(天)

二五\*いらんとおもふ―いらんとかおもふ(神)

題しらす

二五〇\*あし曳の山郭公山にても猶めつらしきはつね成けり

鎌倉右大臣家の御会に、名所時鳥

信生 法師

二六\*こま山のいしふむみねの時鳥きく人かたきねをや鳴らん

藤原時朝稲田姫社にて講し侍ける十首哥に

右大弁光俊朝臣

二七 鳴わたるつくはの山の郭公しるもしらぬもなへてきく也

藤原 泰綱

二八〇\*尋でもつれなかりつるほとゝきすかへる山ちに―こゑそきく

宇都宮神宮寺廿首哥に

藤原 清定

二九 山ひこのこゑもかはらす時鳥いつれのかた。わきてきかまし

杜郭公

藤原 時朝

三〇 いそちあまりおいその杜のほとゝきす鳴ねはかりはをとりしもせし

藤原 重継ムウ

三一 尋きて袖ぞぬれぬるほとゝきすをの涙かもりのしくれか

題しらす

素暹 法師

三二 旅にしてきくはかなしきほとゝきす都にかはるねをや鳴らん

大中臣能範

三三 ほとゝきすなく山さとにすむ人や待もまたぬも初音聞らん

浄意 法師

三四 山かつもたゝにやはきく時鳥松のとほその明かたのこゑ

藤原 頼業

三五 世をすてはいらんとおもふ山のはにかねてかたらふ杜鶺鴒哉



二六\*こゑーこへ(天)

円勇 法師

二七\*をのさ月ーをのかさ月(神学荒影天群)

二七 限なきなみたとみせて時鳥を\*(マ)のさ月の雨に鳴なり

蓮生 法師

二九\*こゑーこへ(天)

二八 ほとゝきす人のこゝろをつくしきてをのかさ月の空に鳴也

平 幹 繩

二九 五月雨に月こそ見えね蜀魄山よりいつる\*こゑきこゆ也

藤原 景綱

三〇 さみたれの空に夜深き杜鵑なにをうけくの時と鳴らん

藤原 能季

三一 あやめ草ねにあらはれて子規さつきゝぬれは鳴ぬ日そなき

出家のゝち五月五日菖蒲のねにつけて人の許へ申つかはし

信生 法師

三二\*申ーナシ(群)

三二 思ひきや袖もあやめも引かへてよをうきぬまのねをかけんとは

五月五日くす玉おこせたる人のもとより、そでのぬるゝな

橘 友家女

三三 けふはみなかくるならひのあやめ草いかなるねにか袖のぬるらん

菖蒲を\* 藤原 基隆リッ

三四 なかきねのしつくなからや菖蒲草さつきの玉と袖にかけまし

五月五日によめる\*(マ) 大中臣景範

三五 わかやとのこさはにきなけ子規けふのあやめのねをつくしつゝ

天群)

三三\*おこせーをこせ(学荒群)、おらせ(天)、\*もと

よりーもとへ(天)

三四\*菖蒲をーナシ(荒)、菖蒲を(神天)、\*玉とーた

もと(荒)

三五\*よめるーよみ侍(影天)、\*こさはー軒は(学荒影

二六 \* 大納言―大納言為家卿(荒)

連生法師八十賀屏風哥

冷泉前大納言\*

二七 さみたれはしのにき舟の河社ぬれてほすへき夏衣哉  
山五月雨

丹波忠茂朝臣

二八 ぬれてほすひまこそなけれ乙女子か袖ふる山の五月雨の比  
浦五月雨

藤原 景綱

二九 \* (〇印)―ナシ(天群)

三〇 \* 〇ひかすのみつものうらの五月雨にほさてやあまの玉もあるらん  
河五月雨

高階 重氏

三一 よしの河いはなみふかくなるまゝにきしもそなる五月雨の比  
沼五月雨

照因 法師

三二 みこもりにからぬあやめやくちぬらんいはかき沼の五月雨の比  
たいしらす

大中臣能範<sub>七</sub>

三三 \* くもの―雲も(神)、\* またぬ―またむ(群)

三三 五月雨のくものいつくに出ぬらんこよひはまたぬ山のはの月  
夜廬橘

坂上 道清

三四 \* 哥―歌に(群)、\* なるらん―成らん(神)、なり  
けん(学荒彰天群)

三四 五月雨の雲間の月も身にしみて花橘のにはふ比哉  
宇都宮神宮寺甘首哥

浄忍 法師

三五 橘の袖のかた見とならさりし昔は何のにほなるらん  
鎌倉入道大納言家御会、隣家橘

源 親行

三六 \* 御会―御会に(神学荒彰天群)、\* 源親行―源新  
行(神)、\* あし 曳の―あしかきの(学荒彰天群)

三六 色も香もかた見なりけり白妙の袖になれにし軒の橘  
題しらす

信生 法師

三七 \* こふる―こほる(神)

三七 いにしへをこふる涙や古郷のはな橘の露となるらむ

権律師隆快

二三七\*藤原泰朝―藤原泰明(荒)

藤原 泰朝

二三七 寸みあらすたか故郷の跡ならむひとりもにほふ軒の橘こ

藤原 泰朝

二三六\*(合点)―ナシ(天)

二三六 くるゝかと思ひもあへぬみしか夜の明行空に残る月影

導阿 法師

二三九\*導阿法師―道阿法師(荒)

二三九 みしか夜のおくるもしらすくむしほに月影はこふたこの海士人

観念 法師

二四〇\*消はてゝ―きへはてゝ(天)

二四〇 こさかへる鶴舟のかゝり消はてゝ又かけみする山のはの月

浄意法師女

二四一\*をく―おく(清)、\*さへ―さえ(彰)

二四一 はちす葉にをくしらつゆの光さへすゝしくみゆる夏のよの月

覚願 法師

二四二\*ちきり―ちかり(天)、\*をかむ―おかむ(神)、  
\*なれはちす―なれはちす(彰)、\*露に―露も  
(天)

二四二 ちきりをかむ後のよまでもととなれはちすの露にやとる月かけ

坂上 家光

二四三\*そはん―そめん(彰)

二四三 秋きてはいかなるかけか又そはんかねてさやけき夏の夜の月

源 親 行

二四四\*哥中に―哥に(彰)

二四四 螢とふひかりみたれて久かたの雲みにちかき秋風ぞ吹

藤原 景綱

二四五\*深夜螢火―深更螢火(彰天群)、\*(〇印)―ナシ  
(彰天群)

二四五 〇ほたるとふなにはのこやのふくる夜にたかぬあしひの影もみえけり

坂上 滋家

二四六\*難波江―なにはて(天)

二四六 難波江やあしまの水に影みえてなみの下にも飛螢哉

源 憲 綱

二四七\*源憲綱―源 (天)、\*つる―くる(彰)

二四七 山の端によこさる雲のさはくよりけしきみえつる夕立の空

夕納涼

坂上 家光

一四 夏ふかきいは井の水のゆふすゝみまたこぬ秋そくみてしらるゝ

題しらす

仏他 法師

一四 ひとくらしの鳴夕くれの村雨にすゝしくおつるまきの下つゆ

行路夕顔

藤原 泰綱

一五 ○たよりも見てこそすきめ玉銚のみちのゆくての夕かほの花

鎌倉入道大納言御会に、六月祓を

藤原 時朝

一五 みそきするせゝの岩波をとたてゝまたよひなからかよ秋かせ

蓮生法師八十賀屏風哥に

冷泉前大納言

一五 ゆふかくるたゝすのもりにみそきしてちとせの秋のはしめをそまつ

(十一行分空白)

新 和哥集卷第三

秋哥

百首哥中に、立秋を

藤原 親朝

一五 けふといへはすゝしくなりぬみわの山秋のしるしの杉の下風

藤原時朝五十首哥に

藤原 基政

一五 おほあらしの杜の下つゆいとはやも草はにおきて秋はきにけり

題しらす

円嘉 法師

一五 ゆふくれはをきそふ露に白妙の袖ほしわふる秋は来にけり

題しらす

信生 法師

一五 故郷のみちのしは草しけりあひてあとなきにはも秋はきにけり

一五 \* (〇印) ナシ(学荒彰天群)、\* (合点) アリ(学

荒群)、\* すきめーすきめ(彰)、\* 玉銚のー玉銚

の(天)

一五 \* 大納言ー大納言家(学荒彰天群)、\* をとー首(学

荒群)、\* たてゝー絶て(学荒)

一五 \* 大納言ー大納言為家卿(荒)、\* かくるーかへる

(神)

一五 \* おきてーをきて(学荒彰群)、\* けりーける(神)

一五 \* ゆふくれー夕され(学荒彰天群)、\* をきーおき

(神天群)、\* けりーける(神)

一五七 \* とつれれーとつれ (神学荒影天群清)

一五八 \* たまつりーたてまつり (神学荒影天群)、 \* 藤原

時朝ー藤原時朝親イ (皇子)、 \* 萩ーおき (神学荒影天、 \* をとーをこ) (神)

一五九 \* 萩ーおき (神学荒影天)、 \* をとーおと (神影天群)

一六〇 \* 萩ーおき (学荒群)、 \* 秋もー秋そ (神学荒影天群)、 \* しらるゝーしくるゝ (学)

一六一 \* (作者名・歌)ー行間小字墨補 (彰)

一六二 \* 夜やーはや (荒)

一六三 \* わたるーわたる (る) 字上ニ朱ニテ〇印 (学)、  
わたり (彰天群)

一六四 \* 源行宗ー源行宗イ宗 (宗) 字「憲」ニ字形近シ (天)

一五七 人とはぬ律の門は\*(マ)とつれれともつゆのやとりに秋はきにけり 藤原重頼女

九条内大臣家へ三百六十首哥\*(マ)たまつりけるに 藤原 時朝

一五八 軒端なる萩\*ふく風を便にて日ころをとせぬ秋はきにけり 右大弁光俊朝臣

稲田姫社十首哥に

一五九 はつ秋風ふきにけらしななきほなる萩\*のうは\*のをと立るまで 源 政 家

一六〇 我宿の軒はの萩\*にふく風のそよくにつけて秋\*もしらるゝ 平 光 幹

題しらす

一六一 みやき野の草はの露もわか袖の涙もゝろき秋のはつかせ 蓮生 法師

一六二 柴の戸やあたし心はむすひをかすさそひなはてそ秋の初風 西入 法師

一六三 さ夜更てすゝしくもあるか天河ゆきあひのはしの秋の初かせ 平 忠 幹

一六四 \* 銀河もみちのはしをいかにしてしくれぬさきにわたしそめけん 藤原 景綱

百五十番哥合に、深夜織女

一六五 ゆきあひに夜\*や更ぬらんあまの川とわたる風の空にすゝしき 証定 法師

一六六 かさゝきのゆきあひのはしのなか空に霧立わたる夜\*そ更にける 源 行 宗

一六七 逢事は年にまれなる七夕の心もしらすふくる夜は哉

曉織女 安部 泰弘

一六 こひわひしそのむつこともつきなくにあけなんとする星合の空

七夕後朝を 藤原 親時

一六 七夕のかへるあしたはもるともに立やわかるゝあまの河霧

藤原時朝すゝめの三十首中に 権律師仙覚

一七 \*三十首中に一三十首哥中に(神学荒彰天群)

一七 秋をまつあまの河原の一夜つまあさ霧かくれ立かへるらん

蓮生法師八十賀屏風哥 冷泉前大納言

一七 \* (二七・歌(二五・歌)一脱落(料紙切取跡アリ)

一七 \* おらしたゝさかのゝ秋の花さかり色の千種にをけるしらつゆ

稲田姫社十首哥に 藤原 朝景二四ウ

(天)、\*大納言為家卿蓮生法師覺也(荒)、\*おらしーを  
らし(神彰)、\*をけるーおける(神)

一七 けさみれは野への千くさのかすことにをのか色く花咲にけり

行路萩を 藤原 親朝

一七 \* 行路萩をー行路萩(彰群)

一七 たひ人のゆきゝのをかの秋の色をたもとにみする萩か花す

故郷萩 平 忠 幹

一七 ほかまとのみやの昔はうへらん今こそこの秋はききの花

題不知 藤原 泰綱

一七 宮城野のふるえのこはき咲ぬれはいろにうつろふ秋の白露

平 時 重

一七 ひとりのみなかむる宿の小萩原さてやちりなん秋風そ吹く

蓮生 法師

一七 をく露のあたのおほのに咲萩のはなもてちらす秋風そふく

浄意 法師

一七 風のをとをあはれと思ふなみたよりみたれそめぬる秋の白露

一七 \*をとーおと(彰)

一五 \* 哥—哥に(群)、\* おき—をき(神彰)

宇都宮神宮寺廿首哥\*  
謙基 法師  
一五 したおきの末はみたれて吹風に袖よりおつる秋の白露  
証蓮 法師

一八〇 \* をと—音(学荒群)、\* おき—をき(神学荒群)

一八〇 あはれとはよそにきくへき風のをとを心とやとす庭のおきはら  
藤原重頼女

一八一 \* (詞書)—宇都宮神宮寺廿首歌に(清)、\* 荻—おき(神)

一八一 里はあれてふり行にはの荻\*のはにとふへき物と秋風そふく  
荻風  
藤原 景綱

一八二 \* まかき—色(群)、\* かけ—おき(群)

一八二 夕くれのまかきは山の下かけにやとりしらする秋風のこゑ  
坂上 道清

一八三 \* をと—音(学荒群)、\* 荻—おき(学荒)

一八三 ふきかふるをとこそなけれ秋ことになしきまゝの荻\*のうはかせ  
源 長 継

一八四 \* おき—荻(学荒彰群)

一八四 かすならぬ身にも心はありけりと思ひしらするおきのうはかせ  
証意 法師

一八五 \* (詞書)—薄(薄、字墨滅)(神)、薄(学荒彰群)、  
\* おくては—おくては(本、神)、うへしおくては  
三字落也

一八五 やまかけにおくてはつれなくてまつほにいつるしのゝをすゝき  
藤原 基隆

(学彰群)、おくては(荒)、\* しのゝを—しのゝ、  
お(神学荒)

一八六 \* しけらは—しければ(群)

一八六 なかめんとうへてし物を花薄しけらはしければ庭もまかきも  
荻萱  
藤原 親長<sup>二五</sup>

一八七 \* 藤原親長—藤原長(学荒)

一八七 秋といへは露をかさねてかるかやの思ひみたれぬ夕くれもなき  
秋夕  
藤原 基政

一八八 \* 成けん—成けり(天)

一八八 なへてよに物のあはれをしることも秋の夕やはしめ成けん  
藤原 朝<sup>時</sup>

一八\* けるーけり(彰)

一八 あはれ世のうきもつらきもしることは秋の夕そたより成ける\*

藤原 蔭清

一九 いまそしるお花かもとの草の名は秋の夕のころなりけり

大中臣光成

二〇 大かたの秋のあはれはさをしかのつまよふ山のゆふへなりけり

平 忠 幹

二一\* ことゝーことく(学)、 \* けりーけれ(神学荒彰群)

二一 そのことゝ思ひさためぬ涙こそ秋のゆふへの哀成けり\*

清原 時季

二二 さひしさは昔もかくやいそのかみふるき宮この秋の夕くれ

藤原親朝女

二三\* ちゝにーちえに(群清)

二三 ちゝに思ふ心そ色にいてぬへきしのたの杜の秋の夕くれ

坂上 滋家

二四\* へはぬーそはね(神彰群)、そはぬ(学)

二四 あくかるゝ心よいかに成ぬらん身にこそゝはぬ秋の夕くれ\*

藤原 景綱

二五\* をは捨ーおはずて(神彰天)

二五 をは捨や月みぬさきの心たになくさめかねつ秋のゆふくれ

西円 法師

二六 なかむれは雲のはたてもさひしくて空に物思ふ秋の夕くれ

壬生 二品

二七 宇都宮神宮寺障子哥

二八 春日山あさみる雲のあともなくゝるれはすめる秋の夜の月  
冷泉前大納言

二九 蓮生法師八十賀屏風哥

三〇 雲もなくふけにけらしな久方の月のかつらの秋のはつかせ  
百首哥に  
藤原 泰綱





三二\* 源宗景―源家景〔家〕字上三墨ニテ〇印〔彰〕

山鹿

源宗景\*

三二 秋きても秋とはみえぬときは山いつとしりてや鹿のなくらん  
なすのへかりしにまかりけるみちにて  
藤原 親朝

三三 さをしかの山ちにかへるあとなれやすそのゝ原の露のむらさえ  
蓮生 法師

三三\* なを―道〔空荒〕

三三 秋萩のさきちるのへのあさ露になをたちぬれてしかそなくなる  
藤原 泰綱  
レモウ

三四\* おのえ―をのへ〔神天〕、おのへ〔彰群〕、\*さを  
しか―さほしか〔天〕

三四 高妙のおのえの霧にたちなれてつまをこめたるさをしかのこゑ  
遠鹿 高階 重氏

三五 はるかなる麓のさとに聞ゆなりみねに夜ふかきさをしかのこゑ  
野鹿 藤原 泰重

三六\* 小男鹿―さほしか〔彰天〕

三六 小男鹿のななき夜すからこゑたてゝあけてのゝちや野へのくさふし  
権花を  
浄意法師女

三七\* 浄意法師女―浄意法師〔荒群〕、\*この歌ナンシ  
〔清〕

三七 秋ことにかはらぬ色をなかめてもはかなき物はあさかほのはな  
権律師仙覚

三八 朝かほの夕かけまたぬ花にこそ定なき世はいとゝしらるれ  
山家権花

源 長 継

三九\* さゝぬ―さらぬ〔彰〕

三九 にはの面は日かけもさゝぬ谷の戸にさかり久しき朝かほの花  
百首哥中に  
信生 法師

三〇 あさなゝゝをく露さむしたかまとの野への秋萩うつろひにけり

蓮生 法師

三三 \*萩—萩(彰)

三三 鷹なきて萩の下葉の色つくはわか袖よりやならひそめけん

藤原 景綱

三三 \*きえあへぬ—きへあへぬ(宇)、きえあえぬ(天)

三三 \*きえあへぬ萩の上葉のあさ露を涙とみせてかりはきにけり

蓮信 法師

三三 鷹かねの涙やかけてみえつらん草葉に結ふ露の玉章

藤原 朝景

三三 \*〔詞書〕—ナシ(群)

三三 初雁のこゑもほのかにきこゆ也霧立わたる明ほのゝ空

淨意 法師

三五 \*こゑほに—こゑをほに(宇荒彰群)

三五 あまを舟はつかりかねも時しあれはこゑほに\*あけて鳴わたる也

藤原 基政

三三 題しらす

清原 公高

三三 秋風にまつとしりてや初鷹のいなはの山のみねに鳴らん

藤原 時朝<sup>二</sup>六<sup>一</sup>

三三 冷泉前大納言家に百首みせてまつりける中に

信生 法師

三六 \*大納言家に—大納言家え(神)、  
(群)、\*ける—侍ける(彰天)、  
\*百首—百首歌

三六 あざといての衣手さむみ雁かねのきこゆる空に秋風そふく

藤原 経光

三三 行路秋

藤原 景綱

三三 秋夜雨

蓮生 法師

三三 吹まよふあらしの風にたくひきてねさめにかゝる秋のむらさめ

三三 秋山さとより人のもとへ申つかはしける

三三



二四〇\*《台忠》―ナンシ(天群)、\*はへて―はえて(天)

鎌倉三品親王家の十首御会に、月前褰衣

源 親 行

二四一\* 心なきしつはた衣おりはへてうたすは夜はの月にねなまし  
里褰衣

藤原 時盛

二四二 をとなしのさと、はいはしすむ人のあれはや今も衣うつらん  
百首哥中に、山家褰衣

想生 法師

二四三 秋風やさむく吹らんしからきのと山のさとに衣うつ也  
題しらす

藤原\* 景綱

二四四\* 藤原景綱―藤原意綱(彰)、\*おはな―をはな(神  
荒彰天)

二四五 なきあかす野原の虫の思ひ草おはなかもとや夜寒成らん  
宇都宮神宮寺廿首哥に

謙基 法師

二四六\* をとらぬ―おとらぬ(神彰天)

二四六 秋の夜のなかし思ひはをとらぬにわれのみとなく蜚かな  
題しらす

西仁 法師

二四九\* かなしき―かなしさ(神学荒彰天群)

二四九 かなしきは秋のならひそ蜚思ひしのひてなかつもあらなん  
題しらす

平 経 成

二五〇 古郷のかきほあれてやきりくすふかき蓬のつゆに鳴らん

清原 公高

二五一 今は、やあさちか原もかれくむしのねよはる秋風そふく

有尊 法師

二五二 なきかはす浅茅か庭の虫のねになみたをそへぬ夕くれそなき

源 親 行

二五三 たまくらによほりなはてそ蜚涙の露はしも、むすはす

成願 法師

二五四 をく露にあさちかはらはうらかれてさひしくなりぬ松むしのこゑ

二五五 \*秋風―あき風(影)

二五六 \*つねなき―つれなき(神学荒影天群清)

二五七 \* (合点)―ナシ(天)

二五八 \*三嶋―三嶋社(神学荒影天群)、\* (合点)―ナシ(天)、\* ましはも―ましはの(影天群)

二五九 \*哥―哥に(神学荒影天群)、\* (合点)―ナシ(天)、\* あらす―あへす(影群)

二六〇 \*葉は―葉も(学荒)

二六一 \*藤原業綱―藤原景綱(神学荒影天群)

二五五 夕されはあはれ身にしむ秋風をうらみかほなる松虫の声  
藤原 国弘

二五六 しくれにもつねなき色は残りあを葉ましりの峯の紅葉  
蓮生 法師

二五七 紅葉ゝ入日のかげや残らんしたてる山の秋の夕雲  
建長三年九月三嶋哥合に  
藤原 時朝

二五八 と山なるならのましはも色つきて夜さむに秋のなりまさる哉  
宇都宮神宮寺障子哥  
京極入道中納言

二五九 秋にあらず色つきそめし立田山いまは時雨のそめぬ日そなき  
題しらす  
浄意 法師

二六〇 いかにして月の桂のもみつ覽雲のあなたは時雨しもせし  
藤原 泰綱

二六一 時雨行日かすにそへてかたをかの杜の木葉は色まさりけり  
藤原 業綱

二六二 時雨するいく田のもりの紅葉はゝとはれんとてや色まさるらん  
想生 法師

二六三 をしなへて時雨にけりなあしひきの山のはことに色まさり行  
玄長 法師

二六四 初時雨ふるからをのに秋ふけてならのはかしは色付にけり  
清原 時季

二六五 はつしくれいかにそむれば龍田山みねのもみちの色まさるらん

二六 \*あへすーあえず(彰)、あらず(天)

二六 \*きしのーきしの(学<sup>木々イ</sup>、木々の(天)

二七 \*ちゝのーちえの(学<sup>ちゝイ</sup>、ちえの(荒群)、\*しのたの杜ーしのた。もり(彰)

二七 \*をしーおし(学荒)、\*猶ーなを(神彰天群)

二六 ときは山いはねに残るした紅葉ふきも忘よ木枯の風

蓮生 法師

二七 秋といへは忍ひもあへすしのふ山いろに出てもちる木葉哉

信生 法師

二六 ちはやふる神なひ山の秋風にきしのもみちやぬさとちるらん

源基氏

二六 木葉ちるいはせの杜をみわたせはならしのをかも秋風そふく

清原 時高

二七 みるまゝにちゝの葉守の神さひてしのたの杜に秋そくれぬる

藤原 泰綱

二七 をしめともとまらぬ秋のなこりまで猶したはるゝゆふくれの空

(十行分空白)

新 和調集卷第四

冬哥

百首歌よみ侍ける中に、初冬を

藤原 泰綱

二七 神なひの杜の木葉もかつちりてしくるゝ空に冬はきにけり

蓮生 法師

二七 みやまへの秋にわかるゝ袖のうへにやかてふりぬるはつ時雨哉

西入 法師

二七 はつしくれ昨日もけふもしからきのと山の里に冬はきにけり

藤原 実好

夕時雨

山家時雨

二五 \* 夕時雨―ナシ(学荒)、 \* ませに―さえて(天)、  
\* 寒き―さむみ(天)

二六 \* 明輪―明瑜(神)、明臚輪敷(「臚」字上二貼紙)  
(学)、明瑜荒天群)、明(輪「輪」字上二朱ニテ

○印、「輪」字朱(彰)、 \* 思へは―思へと(天  
群)

まや敷 とまや敷

二七 \* と山に―とやまに(神)、とやまに(学荒)、とま

やに(彰天群)

二八 \* をと―音(学荒群)

二九 \* 藤原基隆―藤原基隆(学)、 \* なかれ―時雨(群)、

\* きぬらん―きぬらん(神)

三〇 \* 詞書―ナシ(神)、 \* 高妙―高妙(学)、 \* おの  
え―をのへ(神天)、おのへ(学荒彰群)

三一 \* はて―はてし(彰)

二五 雲まよふ夕の空の風ませにしくれて寒き神な月かな

暁時雨を

権少僧都明輪

二六 夜もいまはあけぬと思へはあし曳の山かきくもり降時雨かな

海辺時雨

藤原 親長

二七 おきつ風よそのむら雲さそひきてあまのまや敷山に時雨降也

題しらす

蓮生 法師

二八 雲ちかきみ山のいはのしるしとて時雨のをとのことにはけしき

題しらす

行円 法師

二九 くもまよふ夕の風とみしほとに此里までも時雨きにけり

題しらす

藤原 基隆

三〇 なかそらにうきたる雲のいつくより風にまかせてなかれきぬらん

鶴岳社十首哥に、故郷時雨を

藤原 景綱

三一 高妙のおのえのみやの夕しくれ山もとかけてふらぬ日もなし

後久我太政大臣家に三百六十首哥みせてまつりける中に

藤原 時朝

三二 よの中をあきはてゝより村時雨ふるはわか身の涙成けり

題しらす

坂上 道清

三三 あらし吹庭の木葉のふる郷にしくれせぬよも袖はぬれけり

題しらす

藤原 重継

三四 時雨つゝ山の木の葉の故郷にあかすちれとやあらしふくらん

河上落葉

藤原 時朝



二五\* 藤原時朝—藤原時朝朝〔本行〕朝「都」トモ判

讀可レ（彰）

二六\* をと—音群

二七\* うつむ—うつる（彰）

二五 紅葉ゝのなかれていつるみなとかはこれや錦のうらといふらん

題しらす

淨意 法師

二六 吹すくるをとはひとつにたくひきてよはる嵐に散木のは哉

藤原 泰綱

二七 あらし山さそふもみちやうつむらん麓の里はみちまよふ也

想生 法師

二八 楓もみちちるあらしの山の月かけはしくるとみえてゝりまさりけり

藤原 仲兼

二九\* 楓もみちを—もみちや（神）、\* 中下句—海山かけてちるこかけくもらぬ冬の月の

二九 やま風や残る楓もみちをはらふらん木陰くもらぬ冬の夜の月

坂上 道清

三〇\* （作者名・歌）—〔小字行間朱補〕（彰）  
ぬ冬の月の  
るもみち哉〔本行朱滅、傍記朱〕（彰）

三〇 さゝ波やひらの高ねの木からしに海山かけてちる楓もみち哉

藤原 朝景

三一 山川の水は木葉にうつもれて空にのみすむ冬の夜の月

藤原 朝氏

三二 長き夜のまた明やらぬしはの戸のねさめに寒き木枯のかせ

謙基 法師

三三\* をけ—おけ（神学荒天）

三三 初霜のけさ色くに見えつるほうつろふ菊にをけはなりけり

藤原 時盛

三四\* をのつから—おのつから（彰天）

三四 をのつから秋みし色もなかりけり霜の下なる庭の白菊

蓮生 法師

三五\* 羽をと—をとに（学荒）、はおと（彰）

三五 夕かりに鳥ふみたつるならしはの羽をとまされて霰ふる也

冷泉前大納言

蓮生法師八十賀屏風哥

二六六 \* あしろのーあしろき(彰)

二六六 風さむみうち<sup>\*</sup>のあしろの日をへてはいさよふ波もかつこほりつゝ

宇都宮神宮寺廿首哥に 浄忍 法師

二六七 \* つらーつらゝ(神学荒彰天群)

二六七 瀬たえてなかれもやらぬふる河のみさひなからにつらゝ<sup>ら歌</sup>にけり

題しらす 尼西蓮<sup>レ</sup>

二六八 \* くるーかへる(神)、\*をとー音(神学荒天群清)

二六八 まきもくのあなしの川やこほるらんもりくる水のをとむせふ也

平光幹

二六九 よし野山花よりのちのさひしさをけふなくさむる嶺の初雪

証定 法師

三〇〇 \* 人そー人そ<sup>のイ</sup>(彰)

三〇〇 降雪は花とまかへとよしの山春よりさきにとふ人そなき

深山初雪 坂上 家光

三〇一 \* 猶ーなを(学荒彰天群)

三〇一 木葉にもたえて久しきみ山ちを猶ふりうつむけさの初雪

百首哥に 蓮生 法師

三〇二 ときは木のしけきみ山に降雪は木末よりこそまつつもりけれ

藤原 泰綱

三〇三 \* 雪のー雪に(神)

三〇三 はれやらて時しもわかすふる雪のつもりてたかきふしのしは山

鶴岳社十首哥に 藤原 景綱

三〇四 いかはかりみゆきふるらしかひかねはさやにもみえず雲のかゝれる

山雪を 清原 時季

三〇五 草も木も春にしられぬ花さきて雪にときはの山なかりけり

権律師仙覚

三〇六 花ならはさかぬ梢もましなへて雪ふるみよしの山

仙風 法師

三〇七 \*むは玉―鳥羽玉(群)

三〇六 \*明輪―明瑜(神)、明愉(学荒群)、明愉(天)

三〇五 \*をのつ―おのつ(彰清)、\*跡―路(清)

三〇四 \*おく―をく(天)

三〇三 \*中納言家―中納言家へ(神彰天群)、中納言家に

(学荒)、\*千首哥―千首。(彰)、\*藤原[ ]―  
藤原時朝(学荒天群)、藤原時朝(本行「朝」字  
「都」トモ判読可)(彰)、\*をと―おと(彰)

三〇二 \*峯の―岸の(彰)

三〇一 \*ける―けり(るイ)失(彰)

三〇〇 \*むら―むし(彰)、\*おれ―をれ(神彰)、\*をと

―おと(彰群)

二九七 \*けふりと―煙も(学彰天群)

三〇七 しら雪の消ぬかきりはむは玉のくろかみ山もののみ成けり

故寺雪

権少僧。明輪都\*

三〇六 麓にはあか井の水もあらし山むすふ氷につもるしら雪

山家雪

藤原 泰重

三〇九 かりそめに結ひし柴の庵なれと雪ふるさと、成にける哉

故郷雪

橘 友家女

三〇〇 \*をのつからとひこし人も白雪のふるさといまは跡たえにけり

百首哥中に

坂上 道清

三〇一 しからきのと山もふかく降雪にひはらかおくを思ひこそやれ

京極中納言家千首哥みせたてまつりける中に

藤原 [ ]

三〇二 降雪にうつもれゆけは柴のとをたゝくあらしのをとつれもなし

題しらす

西善 法師

三〇三 月かけのさすにまかする柴の戸をたゝくや峯の嵐成らん

信生 法師

三〇四 とふ人のあとなきやとのさひしさも庭の雪。そあらはれにける

藤原 泰朝

三〇五 さをしかの跡はかりして山里の雪のあしたはさひしかりけり

源 親行

三〇六 ふるゆきにみつのむらあし下おれてをともかれゆく冬のうら風

丹波広長朝臣

三〇七 そことたにけふりとみえず白妙の雪の下なるしほかまの浦

蓮生 法師

三八\*までもみち―までもみち(荒)、\*たえたる―  
たへたる(神)、たへなる(影)

三九\*分し―わけて(影天)

四〇\*哀―あわれ(影)、\*をの―おの(影)

四一\*いは―いわ(天)

四二\*そこ―そら(神荒)、<sup>そこ</sup>空(学)、\*一こゑ―ひとり  
ね(天)

四三\*神行那―神行郊(神学荒影群)

四四\*さえて―さへて(影)

四五\*こすを―こすを(学)、<sup>けい</sup>こすけ(影天群)、\*川辺  
―河原(群)

三八 こぬ<sup>\*</sup>までもみちあるほとはまたれけり思ひたえたる山の白雪

三九 ふみ分<sup>\*</sup>しもみちの跡も見えぬまで又ふりかくす庭の白雪

四〇 いにしへのあとふみつくる雪の中に哀もふかしをのゝ山さと  
山路雪

四一 かよひこし跡ふりうつむ雪の中にふみたかへたるいはのかけみち  
樵路雪

四二 みちそとは心あてにやわけつらん雪よりいつる冬の山人  
沼水鳥

四三 ちりつもる山の木葉にかくれぬの<sup>\*</sup>こともしらぬをしの<sup>\*</sup>一こゑ  
月前水鳥

四四 雲かどていとへはやかてすきにけり月によこきるあちの村鳥  
河水鳥

四五 みなと風さむきゆふへのしほさひにいはかはのほる鴨の村鳥  
宇都宮神宮寺甘首哥に

四六 あしのねのしけき入江の水鳥は下やすからぬねをや鳴らん  
河辺千鳥

四七 月影もきよき河原に霜さえて夜や更ぬらん千鳥鳴也

四八 しもふかきいはかき<sup>\*</sup>こすをふみ分てかよふ川辺にちとり鳴也

藤原 基政

権律師隆快<sup>三</sup>

藤原 朝氏

清原 公高

安部 泰弘

近阿 法師

平 忠 幹

神 行 邦

信生 法師

藤原 景綱

賀茂 有忠

三元 \* 賀茂有忠―賀茂在忠(彰天)、\*さむしーさひし

(彰)

三〇 \* こゑもーころも(彰天群)

三三 \* ならーなた(学荒、なこ(彰天群))

三元 風わたるむつ田のよとの川千鳥鳴ねもさむし冬のゆふくれ

海辺千鳥

藤原 泰綱

三〇 さよこゑもさえ行袖のしほ風にことうらかけて鳴千鳥哉

丹波忠茂朝臣

三三 うなはらやならのしほひの浜千鳥鳴ねもさえて浦風そふく

磯千鳥

清原 公高

三三 有明の月かたふきて松しまやをしまか磯に千鳥なく也

夕鷹狩

行円 法師

三三 かりくらすかたのゝきゝすきこゆ也ふみのこしたる草はなけれと

神楽

座蓮 法師

三四 庭ひたくあたりもさゆる冬のようにしものしらゆふかゝるさかきは

題しらす

信生 法師

三五 \* (合忠―ナシ(天群)、\*おいーおひ(神天)、

\*おなしーをなし(彰)

三五 おいぬれはやすくも年のくるゝ哉昔もおなし月日なれとも

源 宗 景

三六 あはれわか命のほどを思ふにも過るはおしき年の暮哉

浄忍 法師

三七 \* おしむーをしむ(神)

三七 ゆくとしをいまいくたひかおしむへき身なからしらぬ命成けり

藤原 時朝

三八 \* 猶ーなを(神学荒彰天)

三八 行年のけふもくれなはます鏡うつりしかけも猶やかはらん

歳中に春のたちけるつこもりによみ侍ける

浄意 法師

三九 \* 日かすーひかり(彰天)

三九 あやなしやけふをかきりのことしたに思へははるの日かすなりけり

(三行分空白)

新 和調集卷第五

賀哥

百首哥に、寄鶴祝

藤原 泰綱

三四〇

あまの原雲井のたつのごゑなから空にも千世のはしめをそしる

\*八十賀し侍し時の哥に

蓮生 法師

三四一

のりのみちあとふむかひはなけれどもわれもやそちの春に逢つゝ

冷泉前大納言

三四二

はかりなき命は八十たもちきぬ末のみのりのよろつよもみよ

土御門大納言

三四三

八十まで久しくへたる年のをのなかきかひある春にあふらし

権中納言

三四四

めぐりあふかきりもしらぬ春なれば八十のすゑも猶そ久しき

左京権大夫信実朝臣

三四五

わかよはひ君かやそちにをよふてふ猶ゆきつれの千代を待ける

左中将経定朝臣

三四六

やそちふるけふを千とのはしめにて猶行末のほとそ久しき

少将 内侍

三四七

なをも又ちよのよはひのしるき哉今のやそちの心ならひに

弁 内侍

三四八

はるかなる人のよはひをかそふればかつく今もやそち成けり

ル敷 兼 内侍

三四 \*八十賀し侍八十賀に侍(天)、\*われも一これ  
も(学荒群)

三四 \*年のを一年のお(天)

三四 \*八十やうと(神)、八十年(学荒群)、\*猶そ一  
なをも(彰)、なをそ(天)

三四 \*をよふ一およふ(神彰天)、\*猶一なを(彰天)

三四 \*やそち一やとせ(神)、八十年(学荒)、\*千との  
ち

一やうせの(神)、千とせの(学荒彰天群)、\*猶  
一なを(彰天群)

三四 \* (詞書)一八十賀し侍し時の歌にはしめに蓮生法師  
の歌あり則蓮生法師  
の清也、\*なを一まほ(清)

三四 \*けり一けり(学)、ける(彰天群清)

三四九 \* 猶一なを(学荒彰天群)、\* ことたふる(荒)  
(学字、ことふる(荒))

三五〇 \* 長忠一長恵(学荒彰天群)、\* さか。一さかの  
(神)、\* 猶一なを(学荒彰天群)

三五一 \* 老一おひ(学荒)

三五二 \* まもらん一まもららん(学荒)、守らん(群)

三五三 \* 題一たひ(天)、\* 色一ぬろ(天)

三五四 \* ときはーときわ(学荒天)、\* おりー折(神学荒群  
清)

三五五 \* いくめぐりーめぐりきて(天)、\* みかけとゝも  
にーみかけそとにも(天)

三五六 \* そへてーそひて(彰天)

三五七 \* 君かー君の(清)

三五六 かそへしるやそちの峯の松かせに猶よろつ代と山そことたふる  
下野

三五七 西の山八十のさか。たかくとも猶のほるへきみねそはるけき  
法印 長忠

三五八 神にいのるやそちのかすは老らくのよろつよふへきはしめ成けり  
日吉禰宜成茂

三五九 稲田姫社十首哥に、寄神祇祝  
藤原 時朝

三六〇 君か代も我よの末も久かたのあまくたります神そまもらん  
平朝定

三六一 水上もなかれのすゑもすみた川にこらぬみよのためし成けり  
惟宗 行経

三六二 玉津嶋神のうけゝるしとて色ある人や光まさらん  
想生 法師

三六三 いその神ふるの社のさか木葉の色もかはらぬ君か御代哉  
顕信法師女

三六四 わか君のときはかきはのためしとや神代の神おりはしめけん  
源 宗 景

三六五 くもりなき月も千年のいくめぐり君かみかけとゝもにすむらん  
藤原 真義

三六六 寄月祝  
君か代のゝとけき春の色そへてみとりそふかき野へのわか松  
浄意法師女

三六七 神代より思へは久しすみよしの松をや君かためしにはせん  
L 六ウ

神祇哥

少将にて宇都宮(ママ)くたり侍けるつみてに白河の関見侍て

権中納言

三六〇 \* 宇都宮―宇都宮へ(彰天群)、\* つみて―ついで

(神彰天群)

三六一 \* たい―たひ(天)、\* ことの―こと(天)

三六一

白河の関もる神も心あらは我思ふ\*ことの末とをさなん

有尊 法師

三六二 \* 思ふにも―おもひふにも(神)、思にも(天)

三六二

日光山にて神祇哥よみ侍ける中に

権律師謙忠

三六三

すへらきのおさまる御代を思ふにもくとこたちの末そはるけき

三六四 \* えひす―えひす(学荒彰天群)、\* うつの―うつ

三六四

東路やおほくのえひすたいらけてそむけはうつの宮とこそきけ

藤原 仲兼

三六五 \* くだり―くだりて(神学荒彰天群)、\* つけしか

―つけゝる(学荒彰天群)、\* みとゝろ―みとこ

三六五

たひ人の心やすめよちはやふるみとゝる神もさそちかふなる

蓮生 法師

三六六 \* 太神宮へ―大神宮へ(彰天)、太神宮に(群)

三六六

ふりにける神代の杉はそれなからたつぬる人やかはり行らん

信生 法師

三六七 \* 祭草―葵草(神学荒彰天群)

三六七

年ふとも色はかはらし神かせやいすゝかはらの水のしら波

藤原 時朝

賀茂のみあれにまいりてよみ侍ける

座蓮 法師



三七〇 \*題—たひ(天)

三七〇 神山やけふのかさしのあふひ草かくるたのみのゆくゑしらせよ

覚願 法師

三七一 いくとせか波のしらゆふかけつらんきしへにたてる住吉の松

藤原 朝景元ウ

三七二 鶴岳社十首哥に  
すみよしの神のいかきはふりなからいつもかはらぬ松のむら立

藤原 親時

三七三 \*たいしらす  
住吉の松のみとりはかはらぬにとしへにけるといかてしるらん

平 秀 政

三七四 宇都宮神宮寺廿首哥に  
すみよしの松はかきりもなかりけりはまの真砂のかすにまかせて

藤原 親朝

三七五 \*住吉社にまいりて  
しきしまや山としまねをすみよしとさためて神もあとやたれけん

藤原 泰綱

三七六 \*百首哥の中に、社頭月  
をしほ山松も久しき神代よりかはらぬ月の影そのとけき

藤原 景綱

三七七 跡たるゝ神のちかひやかゝるらんあふくみ山の秋の夜の月  
検非違使になりて白襖始に廣嶋社(ママ)にまいりてよみ侍

藤原 時朝レ

三七八 ゆふたすきかけていのりし白妙の袖にもけふはあまるうれしさ  
五位尉になり侍て宇都宮にまいりてよみ侍る

謙基法師妹

三七九 しめはふるあけの玉かきうつりきて猶オ色まさる我袂かな  
宇都宮神宮寺廿首哥に

謙基法師妹

三八〇 ふたつなきみつなきのりの玉かつら神も心にかけてあはれめ

三七四 \*哥に—哥(学荒彰天群)

三七五 \* (合忠) —ナシ(天)、 \*しまねを—しまねは(彰天)

三七六 \*をしほ山—おしほ山(神)、おしを山(天)、 \*かはらぬ—かわらぬ(学)

三七六 \* 廣嶋社—鹿嶋社(学荒彰天群)、 \*まいりて—参て(神学荒群)

三七九 \* 猶—なを(神学荒天)

三六一 \*おほつ山—おほえ山(彰群)、おほへ山(天)、

\*たえせね—たえせぬ(神学荒)、たへせぬ(彰)、  
\*あはれ—あわれ(彰)

三六三 \*日光山—日光山(天)、 \*なに事—なにかと

(神)、 \*よりいた—よりはたリイイ(傍記横二不審紙)  
(学)、 よにはた(荒)

三六四 \*月—月を(彰天群)、 \*雲は—空は(学)、 空は  
(荒)

\*釈教—尺教哥(群清)

三六五 \*賀し侍—賀に侍(天)、 \*空も—空は(群)、

三六六 \*大夫—大夫(神荒天)、 \*よの影—月影(彰天群)

三六七 \*権中将—持権中納言(神)、 権中納言(彰)

三六八 \*おなし—をなし(神)

三六九 \*詞書—八十賀し侍けるにはしめに蓮生法師(清)、

\*おしふる—をしふる(神群清)、 \*さはかめ—  
さりかめ(清)

題しらす

三六一 \*おほつ山むかしの跡のたえせねはあまてる神もあはれとやみん

丹波忠茂朝臣 円勇 法師

三六二 ちはやふる神のみむろのみしめなはくる人ことによをいのる哉

浄意 法師

三六三 \*日光山にまうて、

三六四 \*なに事を松のあらしも思ふらんおりくたく神のよりいた

三六五 \*くまもなき月もみしまの山かせによをうき雲は残らさりけり

三六六 \*かすむ夜も木のはかくれににたる哉鷺のみ山の春のよの影

三六七 \*わしの山つねにすみけるかけなればかはらすみゆる春のよの月

三六八 \*たえすすむ面影みせて二月やおなし昔のもち月の空

三六九 \*行道をおしふる法のなくはこそひみつの河のなみにさはかめ

三七〇 \*ゆきやすき道としりぬる心こそやかてうき世の外にすみけれ

蓮生 法師

左京権大夫信実朝臣

権中将光成朝臣

左近中将為教

漢壁門院但馬

權律師頼観

権律師頼観

権律師頼観

権律師頼観

権律師頼観

権律師頼観

権律師頼観

権律師頼観

権律師頼観

権律師頼観

権律師頼観

権律師頼観

権律師頼観

権律師頼観

権律師頼観

権律師頼観

三九一 \* 因一解悟一因解悟(学荒群)、\* つけたる一つけ  
ゝる(彰天)

三九二 \* 心一心を(神学荒彰天群)、\* (合忠)一ナシ(天)

三九三 \* 流通一流通通イ(学)、流道(荒)、\* おなし一をなし  
(神)

三九四 \* (合忠)一ナシ(天)、\* をしへ一おしへ(学荒彰  
天)

三九五 \* 下品一下品品(学)、\* 猶一なを(天)、\* すみけり  
一つみける(彰)

三九六 \* 愚惟一愚惟(学)、思惟(彰天群)、\* たえ一たへ  
思(学荒)

三九七 \* 日想観一日想(天)、\* 権僧都一権少僧都(彰)、  
権少僧都(天)、\* 明瑜一明瑜(学彰天)、明瑜  
(荒)、明瑜(群)、\* むすふ一むすふカイ(学)、向ふ  
(彰天群)

三九八 \* 止観一止敬心観(彰)

三九九 \* 浄明一常明(神)

因一解悟百千門の心を 信生 法師

三九一 鶯の春をつけたる一こ急にさと、ひらくる花のいろく  
光明宝林演説妙法の心\*

三九二 木の間よりもりくる月も松風も心すゝむる夕くれの空  
耆闍流通の心を 蓮生 法師

三九三 み山にもおなしにほひに咲にけり宮この花の色もかはらて  
在々諸仏土常与師俱生の心を

三九四 をしへ\*)をく露のかことをたよりにてひとつ草葉にやとる月かけ  
下品下生の心を

三九五 みちもなく忘れはてたる古郷を月は尋て猶\*)すみけり  
入於深山愚惟仏道

三九六 ふみなれしうきよのあととはたえはて、道なき山に道をたつねん  
日想観 権僧都明瑜\*

三九七 山のはの入口にむすふ夕暮はたのむひかりのさすかとそみる  
空花の喩を 証観 法師

三九八 いかなれば花とはみけんしら雲のみねにわかるゝ色そむなしき  
止観第六卷に、初果猶未断の心を三ウ 西円 法師

三九九 暁はほのかに残るともし火のきえなむとてやひかりそふらん  
日光山にて、又如浄明鏡悉見諸色像の心を 権律師謙忠

四〇〇 曇なきおなし鏡にみる人のおもひくのかけそかはれる  
我宿罪生此惠子の心を 藤原 時朝

四〇二 \*〔合点〕―ナシ(彰天)、\*あらはる、―あらわるゝ(天)

四〇二 今さらにみぬさきの世のつらき哉さらすはかゝる物は思はし

説是語時無量寿仏住立空中の心を

四〇三 時鳥かたらひひつる雲間よりかけあらはるゝ有明の月

六道輪廻の心を

仏也 法師

四〇四 浮世にはいまいくたひかむまるへきこれをかきりのわか身とも哉

人命不停過於山水

四〇五 山川のなかれてはやき水よりもたらぬ物は命成けり

たいしらす

平 忠 幹

四〇六 \*たい―たひ(天)、\*行―いる(神学荒彰天群)

四〇六 さとり行まことの道はひとつにてまどふにおほき法の門哉

松嶋の見弘上人に法華経うけ侍て、此縁によりて後生にかならずあひたてまつらんとてかへり侍けるに、かの上人の

許より

四〇七 \*見弘上人―見仏上人(神学荒彰天群)、\*法華経うけ―法華経申うけ(学荒群)、\*よりて―より

四〇七 なかき夜のやみにもまとふ身なりともねふりさめなは君をたつねん

つゝ(神)、\*〔合点〕―ナシ(天)

返事

蓮生 法師

四〇八 \*〔合点〕―ナシ(天)

四〇八 やみちにはまとひもはてし有明の月まつ嶋の人を頼みて

藤原時朝あまたつくりたてまつりたる等身の泥仏をおかみ

奉りて

浄意 法師

四〇九 \*藤原時朝等身の―(行間小字皇補(神)、\*ける―けり(天)

四〇九 君か身にひとしと聞し仏にそ心のたけもあらはれにける

返事

藤原 時朝

四一〇 \*仏にて―仏にも(彰)

四一〇 心より心をつくる仏にて我身のたけをしられぬるかな

鹿嶋社にて唐本一切経供養し侍ける時、日ころはあめやま

す侍けるかけふしも空<sup>ニ</sup>ウはれてことゆへなく供養とけぬる  
ことゝて、導師  
権僧正隆弁<sup>\*</sup>

四〇\*権僧正隆弁―権僧正隆弁(群)、\*《合点》―ナシ  
(天)

四〇 今<sup>イ</sup>よりや心のやみもはれぬらん神代の月のかけをうつして  
返し  
藤原 時朝<sup>\*</sup>

四一\*藤原時朝―藤原明朝<sup>時朝</sup>〔本行「朝」字「都」トモ判  
読可〕(彰)、\*《合点》―ナシ(天)

四一 ちはやふる神代の月のあらはれて心のやみはいまそはれぬる  
(九行分空白)